

知行院便り

発行/宗教法人知行院 東京都世田谷区喜多見 5-19-2 TEL 03-3417-3456 FAX 03-3417-3000



新年おめでとうございます
今年の干支は「戊戌」、戌年です
「戌」という漢字は「二印」と「戈」という漢字から成り立ち、元は作物を刃物で刈り取りひとまとめに締めくくることが表しました。また、「戌」は「滅びる」を意味する「滅」で、草木が枯れる状態を表しているという見かたもあるそうです
戌年の前の酉年は、成長してきた草木が実を結ぶという意味があります。また、戌年の後の亥年は、滅びた後に新たな種子ができるという意味だそうです。つまり、戌年の「ほろび」は、実を結んだ草木がいったん枯れ、その後で新しい芽吹きへと生命が繋がっていく、そんな大切なバトンタッチの意味も持っているということになり、決して悪い意味ではないようです
昨年十二月一日、一八一七年の光格天皇以来、約二〇〇年ぶりに天皇陛下が退位する日程を話し合う皇室会議が開かれ、二〇一九年四月三〇日に退位され、皇太子さまが同年五月一日に新天皇に即位され、同日に改元することとなりました
奇しくも、現在進めております、山門・参道の大改修も再来年の春に完成し、皆さまにお披露目をする予定です
施工を請け負って頂く大工さんは、六〇〇年はもたせるつもりで建てますと意気込んでいますので、次の世代、新しい時代に繋げる為にも、バトンタッチの「戌年」にしっかりと準備していきたいと思っております
皆様の更なるご理解とご協力をよろしく願います

ごあいさつ

知行院住職 坂本観泰

知行院通信

タイ国王の追悼式に参加

住職は九月二十二日 バンコク、プラナコーン区タイ王宮「ロイヤル・グラウンド・パレス」にて執行された、プミポン・アドウンヤデート国王の追悼式に世界仏教徒連盟(WFB)を通じて全日本仏教会の一員として参列しました
国王の遺体が安置されているバンコクの王宮内のドウシット・マハ・プラサート宮殿にてタイ

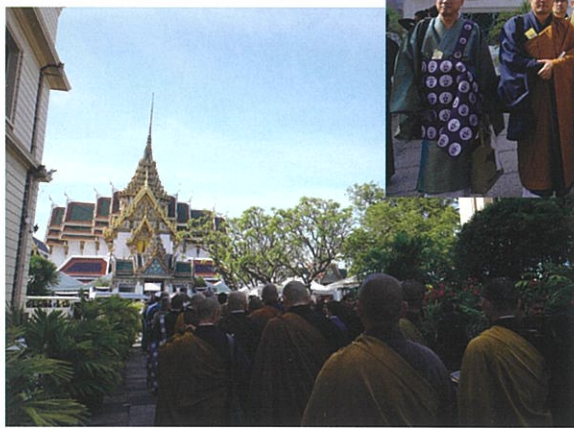
した。土葬の場合、ほおって置くのご遺体が腐敗してきますので、できるだけ早く埋葬しなければなりませんからね。
知行院でも、昔からの檀家さんは、そうした頃の習慣のまま、当たり前のようには葬儀の当日に埋葬されます。むしろ、四十九日に納骨という習慣は、最近のものです。
納骨を先延ばししないというのは、故人を亡くした哀しみから立ちなおるという点でも意味があります。あまり長く自宅にご遺骨を置いておくと、悲しみを引きずってしまうことが多いようです。
別れ難い気持ちもわかりますが、遺された家族が、一日も早く元気な生活を取り戻すことも大切です。葬儀当日に納骨するということには、そうした意味もあるのです。

仏教と日本仏教との更なる友好を誓い静かに手を合わせました
尚、国王のご遺体は王宮前広場に建設された火葬施設で、荼毘に付され翌二十七日朝、前国王の長男のワチラロンコン国王が火葬施設でお骨拾いの儀を行われました。遺骨と遺灰は王宮内の寺院と宮殿に収められています。



全日本仏教会の参拝団 (右から三番目が住職)

追悼式会場に向かう参拝団



ご案内

永代供養墓を建立しました
——お墓の悩み、ご相談ください

本堂の横を脱けて墓地に入つてすぐのところ、永代供養墓を建立しました。
永代供養墓とは、跡継ぎが無くても、お寺がご家族にかわつて、永代にわたり供養をするためのお墓です。
お檀家の方でお子様のいない方はもちろん、お檀家の親類などで、諸々の事情で代々のお墓を守っていくことができない方、親類で納めるお墓の無いご遺骨も、ご案内いただければ、お寺が守りするようにいたします。
また、事情が複雑で、どうしてもいいかわからないという方もご相談ください。よくお話を聞いた上で、一番いい解決方法を考えさせていただきます。



変わる知行院の境内

山門の改修について

前号で山門の修理のことをお話しになりましたが、そろそろ工事が始まるそうですね。

住職 そうですね、まずは年内に解体工事を行いますので、この『知行院便り』が皆さんのところ届く頃には、既に解体された後になると思います。解体された木材は大工さんのところに持って行きます。傷んでいる木材もあるので、まずはどれだけ使えるかどうかを見てもらいます。

——なぜ新しく建て替えじゃなくて、改修なのですか……

住職 知行院は、先代住職の時に、かなり境内整備が進み、ほとんどの建物を建て替えることができました。今となつては、古い時代の建物は山門だけとなつてしまいました。享保年間のもので、三百年はたつています。前号でお話ししたように傷みが激しいのですが、私としては、できるだけ残したいと思つたのです。

——そう大工さんにお話ししたところ「残せるところは、残しましよ



解体工事前の予想以上に屋根は傷んでいた

う！」と行つてくれました。それで、まずは解体して、どこまで残せるのかを見てもらうことにしたのです。

——工事を行うのは、どんな大工さんですか？

住職 京都の宮大工さんで、奈良を中心に活躍されている有限会社真堂という会社です

実は、どんな会社に修理をしてもらうかを決めるのは、けっこうたいへんでした。いくつかの会社に声をかけて、話を聞いたのですが、その中でいちばん信頼できる会社を選ばせていただきました。とても職人気質の宮大工で、昔の工法にとっても造詣が深いということも、決め手のひとつでした。

——改修工事後は、前の山門と何か変わるのでしょうか？

住職 そうですね、材料は活かしますが、かたははだいぶ変わります。これまでは、シンプルな切妻屋根でしたが、改修後はちよつと複雑なかたちをした唐破風の屋根になります。

山門は、道路近くまで移動をさせるのですが、そうすると、道路を歩く人からは、山門の正面だけでなく、側面もよく見えるようになります。そのため、宮大工さんから「この山門の位置なら、唐破風のほうが美しく見えるんじゃないか」とアドバイスされたのです。

また山門を移動するのは、入口の右側の土地を返していただいたので、その場所を活かすという理由もあります。道路際まで移動しますので、山門を入つてから本堂までの参道が長くなります。少し遠くから本堂を見上げるようになるので、その分、本堂の姿が美しく見えるのではないかと想像しています。

教えて、住職さん！ 第二回 お墓と現代

お寺のこと、仏教のことで、知ってるようでよく解らないことを、ご住職にインタビューして、教えていただきます。第三回目は、お墓について解説していただきました。

(聞き手 編集担当 薄井秀夫)

聞き手 最近、少子化で、お墓の維持が難しくなっている方が増えていると聞きます。知行院でも、やはりそういった方はいらつしやいますか？

住職 そうですね、たくさんというわけでは無いですが、時々、そういった相談はあります。先日も、ひとり娘が嫁いでしまったので、お墓のことで娘の嫁ぎ先に負担をかけるわけにいかないからと、相談に来られた方がいました。

ただ、親と子の感覚は違つていて、親は負担をかけられないと思つていても、娘さんのほうが「やつぱりお墓が無いときびしいから、残して欲しい」と言つていました。どうもお墓を継ぐことのできるのは男性だけと考えている人が多くて、はじめから諦めているケースもありますね。確かにお寺によつては、家を継いだ男性しか、お墓を継承することができないということもあるようです。

知行院では、息子さんでも娘さんでも、護ることのできる人がお墓を継ぐことができるようにしています。皆さんには、亡くなつた後も変

それから耐震のことも考えて、柱をこれまでの四本から六本に増やし、また屋根の高さは五〇センチメートルくらい低くすることにします。

——山号額も掲げるそうですね。

住職 はい、天台宗最高位の天台座主に次ぐ次席探題であられる大樹孝啓大僧正（書写山門教寺住職）に揮毫をお願いすることができました。大樹大僧正は、いろいろとご縁があり、とてもかわいがつていただいています。駒込高校のOBで、先代住職とも親交があり、二代にわたつてお世話になっていきます。そうしたご縁で、普通であればとてもお願いすらできませんが、有り難いことに今回、お受けいただくことができたのです。

——いつ頃、完成するのですか？

住職 最終的には、再来年（平成三十一年）の春彼岸を目標にしています。

先ほど申しあげたように、解体したら、奈良の宮大工さんのところに材料を持って行きます。それでどれだけ使えるかを見た上で、新しい設計にあうように木材を整えていきます。来年中には、材料も整い、一度工場で組み立てて、確認した上でばらし、再来年春に知行院に持つてきて再度組み立てることになります。

その間、山門から本堂までの参道を整えたり、生垣をつくつたり、自動車用の門をつくつたりします。

ちよつと時間はかかりますので、皆さんには不便な思いをさせるかもしれません。でも、完成したらたら駐車場も増えますし、いろいろと楽しみにしていただければと思つています。

(聞き手 編集担当 薄井秀夫)

でもお弟子さんたちは、そうは言つても心のより所が欲しいと感じて、仏塔を建ててお釈迦さまの舍利（骨）を納めました。それが仏教におけるお墓の始まりだという説もあるそうです。

そもそもお墓というのは、信仰の対象物です。手をあわせる対象です。だから、家の名前を刻むのではなく、仏さま（の名前）を刻むのが本来です。

知行院にも残っているけれど、江戸時代くらいのお墓は、舟形をしていて、真ん中に仏さまが刻んであり、その両側に夫婦の名前が刻まれているというものが多かつたようです。つまりお墓に手をあわせるというのは、故人だけでなく、お浄土にいらつしやる仏さまにも手をあわせるということでもあります。

昭和の四十年代、五十年代くらいに、「〇〇家の墓」というのが流行つたので、その後は、それがあたりまえのようになっていきますが、もともとお墓は「南無阿弥陀仏」のように仏さまの名前や姿が刻まれていたのですね。

聞き手 それからお墓への納骨ですが、知行院では、葬儀の当日に納骨される方が多いと聞きましたか？

住職 最近では、当日に納骨というのは少なくなつてきましたが、もともと日本は土葬で、葬儀を終えたらすぐ埋葬するというのが普通で（次ページに続く）